2022 年 7 月 28 日､29 日の 2 日間で開催されました第 40 回日本受精着床学会学術講演会へ発表・参加させていただきました。

今年度は保険適応開始されたこともあり、盛んなディスカッションとなりました。
また、社会情勢の変化により着床前診断の見解が改定され、その中での学会となりました。

今回、当院から発表した内容について触れさせていただきます。

「ART における夫の加齢が胚発生に及ぼす影響についての検討」について報告しました。

男性側の因子が生殖補助医療成功において他の因子と同様重要であると考えます。男性因子では顕微授精を治療法として選択することになりますが、顕微授精に使用した精子の DNA の損傷（断片化）がある場合、受精やその後の胚発生および妊娠予後に影響を与える可能性があります。顕微授精適応となる不良な精液所見の場合、DNA 断片化の比率が高いとの報告があります。それに加え、加齢による影響も報告されています。本発表では夫の年齢に着目し、受精、胚発生および妊娠予後に与える因子となるか検討し、発表させていただきました。

今回、妻 35 歳未満で胚盤胞培養した 7134 個を対象としました。さらに、夫年齢を 2 群に分け 28～40 歳未満；6077 個、40 歳以上；1057 個とし比較検討したところ、受精率、Day3 良好胚率､Day 5 胚盤胞率および良好胚盤胞率で夫年齢が 40 歳以上で低値となりました。加齢により射精精液に占める DNA 断片化の割合が高ければ影響を受け、発育の遅延もしくは停止に影響を与える可能性が考えられました。

妊娠率と流産率については今回の検討では夫年齢の影響はなく、発生の過程で精子の影響を受けた可能性がある胚は、胚盤胞へ発育しないもしくは不良胚盤胞である可能性があると考えられました。妊娠予後に影響はないものの、受精および胚発生に影響を及ぼす可能性があることから、他の因子同様、男性側の年齢も重要な因子であると考えました。

別紙、学会資料も HP に掲載しておりますので、ご参照ください。

胚培養士　今井　和美